

## 聞法の心

北 西 弘

私ももう、別に自慢するわけではございませんが、五十六歳を過ぎました。五十六歳を過ぎますと、学問をする人間として、そうそう身体が続くものではございませんので、一体自分の生涯において、何が本当の仕事なのかということをしるる感じ出すものであります。私は歴史をライフワークとする者でございますが、人間の心の動きと申しますか、そういうものをどう見極めるかという方法論、これを明白にしたいと考えております。歴史というのは、ご存じのように資料を中心にしてあるわけですが、資料というものは、非常に注意して見ないと本当のことがわからないことがあります。「今日はどうもあの会合に行きたくない」という場合

に、風邪もひいていないのに「風邪をひいて、行けません」という手紙を書くと、その資料が残ります。そうすると、この人は何月何日に風邪をひいていたのだということに、単純になつてしまふわけで、これではもう資料にならないわけです。そういうことで、人間の心というものを、どのように歴史の中に生かし切るかということが、重要な課題であります。その方法論を明白にするという点で、こういう話があります。

白山麓の鳥越という村でございますが、この村に恐らく紀州の出身だろうと思つてのですが、鈴木出羽守という豪族がおりまして、天正八年まで信長と戦うわけであります。彼は信長軍の謀りごとに遭いまして、親子とも首を切られるわけでございますが、それから後、この鈴木出羽守を支援していた鳥越村近辺の門徒村民が、天正十年まで信長の軍勢と戦うわけであります。大体一向一揆と申しますと、天正八年に大坂石山本願寺を信長に渡してこれで終わったということになりましたが、天正十年まで名もない人々が白山麓の山内庄で戦つて、そしてこれも謀りごとに遭いまして、その年ついに三百人ばかりが磔になるわけです。そこで私の関心は、何月幾日にどういう事件があったかということよりも、その二年間、孤立無援の中で、名もなき信者たちが、どういう思いで戦つたんだろうということであります。ちょっと余談になりま

## 心の法聞

すが、この十五日に皆さんご存じのように、ブルガリアの出身でございますが、エリヤスカネティールという人がノーベル文学賞を受けました。この人について、日本の新聞はあまり深く報道はしておりませんが、現在七十六歳で、私、歴史を専攻してからずっと、このエリヤスカネティールのような仕事をしたいなあと今日まで思い続けている、尊敬する人物であります。この方は歴史家ではありません。歴史家ではなくて、文学賞を受けたように、元来は詩人になりたいという気持ちがあったのですが、七十六歳の今日までに、例えば日本の新聞では『ネマイ』という本を書いているのが報道されておりますが、実はこの方は三十五年間一つの問題を追い続けてきたのです。その問題は何かといいますと、群衆と権力という問題であります。『群衆と権力』という本を三十五歳を過ぎてから出版いたしました。これが日本語訳にもなっております。法政大学出版局から出ております。このエリヤスカネティールのような仕事をしたいと常々思っているわけです。

この『群衆と権力』の中で、非常におもしろいことを言っています。その中の一つは、これは恐らく、今後もエリヤスカネティールさんが死ぬまでその信念はゆるがないだろうと思うんですが、「生き残る瞬間は権力の瞬間である」という言葉です。これはどういうことか。例えば

私も戦争に出まして、今まで横で元氣にしていた戦友が、たった一発の弾できりぎり舞いして死んでいく、そういう状況の中をくぐったわけですが、戦友が戦死して非常に悲しいのですけれども、私が生き残ったわけです。その生き残った感情というものは何か。神様か仏様が私を守っていてくださるのだ、死んだものはその守りから除外されたのであって、私は生き残ったのだというので、自分は善人であるという考えを持つのです。選ばれた人間である、と。皆さんはそういう残酷なことをお考えにならないかもしれません。例えば友だちとニコニコ笑って歩いているうちに、友だちが交通事故でばたつと死んだという場合に、私は生き残ったんだというような気持ちには恐ろしくならないかもしれませんが、その意識の片隅に、そういう生き残る瞬間というものは権力の瞬間であるということを感じさせる場合が、ひょっとしたらあるかもしれないのです。その問題は別として、この生き残ったものの意識、これを非常に鋭くついているのが、エリヤスカネティーなのです。だから彼はいわゆる世の中から悪しき意味の権力というものを追放する場合には、まず「生き残った瞬間は権力の瞬間である」という、つまり生き残った者の勝利感ですね、この勝利感をつぶさないと権力というものはつぶれないのだという考えを、持っているのです。非常におもしろいのですが、生き残った人間の選

心の法聞

ばれた意識というものと、もう一つは生き残った者の他に對する苛酷な弾圧の心、この二面を  
 エリヤスカネティーは書いております。十四世紀になりましょうか、インドのデリーにツィグ  
 ルプという王朝がありました。このツィグルプの王朝の第二代目のツィグルプであります、  
 彼がヒマラヤを越えて中国を征服しようという計画を持ったわけです。あのヒマラヤを越える  
 というのは大変なことだろうと思うのですが、それを越えて中国大陸を平定しようという計画  
 を持って、十万の騎兵隊を派遣したわけにあります。ところが暑い所の兵隊ですから、あのヒ  
 マラヤを越えることができない。途中で全滅、といっても十人生き残るわけなんです、殆ど  
 全滅したわけです。そしてその十人が命からがら、このデリーへ帰ってきてツィグルプ王にそ  
 れを報告したわけです。ツィグルプ王は、報告を聞いてただちにこの十人を惨殺してしまつた  
 事例があります。つまり、生き残るのは私であつて、おまえは生き残つてはいけないのだとい  
 うことが、やはり一つの悪しき觀念としてあるわけなのです。だから生き残つた者の善人意識  
 と、生き残つた者に対する憎しみを両面分析して、このエリヤスカネティーが書いているので  
 す。そういう点からいいますと、例えば私なんかは一向一揆あたりを専門にしていますが、生  
 き残つた者の残した資料——資料は、大体生き残つた者が残すわけですが——非常に信頼でき

ない面があるのです。

例えば、戦争をいたします。非常にひどい戦争をやって、百人の兵隊のうち九十八人まで死んでしまった戦争に直面したとします。生き残ったのは二人です。資料はその二人が書くわけですね。百人のうち九十八人まで死んだというのは敗北であります。敗けたことなのですが、その生き残った二人が資料を書いた場合に、素晴らしい戦闘をしたように書くわけです。生き残った者の権力感です。勝利感です。このエリヤスカネティーのいわゆる直感的な作品を読んで、私も歴史学徒としてそういうものをやりたいなあと考えて、今日そのぎりぎりまできているわけであります。そういう点で、人間の心というようなものを、どういう具合に読んでいくか。それを歴史学のうえで明白にするというのが、恐らく私の死ぬまで続く重要な課題になります。そういう課題を持っておりますので、今日はひとつ、皆さんに中世の眞宗教団の実態とということについてお話し申し上げたいと思います。

高校の、恐らくどういふ教科書にでも、本願寺蓮如という名前は出てまいります。蓮如は當時救われなかった庶民を教団に引き入れて、親鸞聖人のみ教えを伝えていった。そういう点では眞宗というのは非常に庶民教団であり、その庶民のエネルギーが燃焼して一向一揆が起こっ

## 心法の聞

たというようなことは、どういふ教科書にでも書いてあるわけです。そこで、この教科書のいうことが果たして正しいのだろうかという疑問から、皆さんにお話ししたいと思います。どういふ集団でも、どういふ人の集まりでも、いろいろな型があるのですが、非常に大ざっぱに分けて、集団とかコミュニケーションには二つの型があると思います。その一つは何かと申しますと、官僚型集団であり、今一つはサークル型集団であると思います。アメリカの社会学者で、オット・ラービンジャーという人がおりますが、この方が『コミュニケーションの本質』という本を出しております。その中で、若干コミュニケーションの問題として触れておりますが、この官僚型というのはどういふ型であるかと申しますと、トップの人間がいて、その人間が二人の人間に命令を下し、また、コミュニケーションする。それを受けた二人の人間が、更に四人の人間にそれぞれコミュニケーションしていくというピラミッドのかたち、それが官僚型であります。それに対してサークル型というのは、民主主義の基本がこれに当たるのでしよう。だから真宗の教えは、御同朋、御同行というから、これは論理的には当然サークル型だと、こういうように考えるわけです。

ところが結論から申しますと、あの中世における真宗教団というものの本質は、日本の国で

恐らく初めて庶民を巻きこんだ官僚型集団の確立であると、私は考えております。唯、ここで皆さんに一つ断っておかなければならないのですが、それは官僚型とは何かという問題であります。皆さんは、官僚制というと、あの人は官僚的だとか、この学校は非常に官僚的だというふうに、悪い意味に使うだろうと思うのです。もちろん官僚制というのは、権力という点から考えてみますと、現代社会に合わない一つの組織であって、古く悪しき意味、こういうように解釈していいと思います。

ところが組織論のうえからいいますと、官僚制というのは必要でございませう。つまり人間が集まってそれが一つの集団をつくってゆきますと、集団は当然管理運営されなければならぬのです。管理とか運営というものを抜きにした集団は、烏合の衆でございませう。そういう点で官僚制というものは、組織に付随して必要なものであるという考え方もできるわけです。現代の社会のように、だんだん大きな組織ができて、その組織の人間それぞれが機械化してくるような状況が推進すると、いよいよ官僚制というものが必要になってくる。つまり官僚制というものが過去のものであって否定すべき存在であるという見方ではなくて、今後いよいよ官僚制というものが必要になってくるという見方もあるわけです。



## 心法の聞

官僚制といっても内容は非常に複雑で、今、官僚型コミュニケーションといった場合にその両面を考えていただいても結構ですが、一つの集団の型であります。ところがこういう一つの集団、これは皆さん他人ごとのように思っていたでは困るので、例えばクラブの部長さんならその組織をどういうようにして統一していくかという課題を持っているだろうと思いますから、他人ごとではございません。この官僚制というものを維持していくために、何が必要であるかと申しますと、そのためには権威というものが必要です。権威のない統一はできませんので、権威が必要になるわけです。そこで、その権威というものを考えますと、この権威がそういう組織を運営していくための形態になるわけです。そこで官僚型の集団というものは、必ず権威主義的なパーソナリティーが必要になるわけで、その権威主義的なパーソナリティーというものは具体的にどのような形であるかという点、例えば服従という格好になっています。権威主義的服従がないと、官僚組織というものは維持できないのです。この辺が難しいところなのです。私は今、中世の真宗教団が、日本における官僚型集団としては典型的なものであると、大胆に申し上げたわけです。そういう場合には、当然官僚型を維持するために、権威主義的なパーソナリティーが真宗教団に生まれてくる。そしてその権威主義的な服従というものが

みられるようになる。ところがその集団の中にいる門徒の人たちは、これは支配に対する服従だとは意識しないのです。つまり親鸞聖人の教えの中に、法然上人に対して、よき人の仰せを被って信ずる他に別の子細がないとおっしゃっておられる。自分はよき人の仰せを被って信ずるほかに別の子細がないのだと。言葉を変えていうならば、法然上人と一緒に地獄に落ちてても悔いがないという心です。これは純粹な宗教的信念なのですが、この親鸞聖人の言葉を、世俗的な官僚組織における権威主義的服従の心にすり替えて、組織を維持するという格好があったわけです。この辺が非常に難しいのですが、それを見定めて判断する能力というのが、歴史に要請されるわけであります。逆にそういう権威主義的服従と裏腹に存在するのが、権威主義的攻撃性というものであります。つまり自分たちの集団に対して横やりを入れたり、あるいは自分たちのその集団を阻害していくようなものに対する憎しみ、攻撃性というものがこの集団を維持するために当然必要になるわけです。権威主義的パーソナリティが、真宗教団においては下から盛り上がってきたとみていいと思います。ですからそういう人たちは、自分たちの宗主である蓮如上人を、カリスマとして見るようになったわけであります。これを極力否定されたのが蓮如上人であります。蓮如上人の資料によりますと、吉崎へお詣りにくる信者たちが

心法の聞

皆、阿弥陀様をさておいて蓮如上人を拝んだのです。それに対して蓮如上人は「私を拝むくらいならその辺の卒塔婆でも拝みなさい」と皮肉っている言葉があります。これは自らそういう民衆の権威主義的なパーソナリティを否定された言葉であると、指摘できるだろうと思うのです。この権威主義的服従というものが、どういう形で真宗教団に表れてきたかというところ、これが一向一揆であります。どの教科書にも、一向一揆は庶民のエネルギーの爆発であると書いてあります。長享二年には加賀の国では富樫政親という守護を殺しました。守護を打ち破るほどの力を民衆が持ったという点で、今まで革命的に評価されてきたわけであります。ところが一向一揆というものは決して革命的なものではないと思います。

長享二年にこの加賀の一向一揆が加賀の守護の富樫政親を破って間もなくであります。蓮如上人は「蓮如成敗の御書」というものを書いておられます。今後、一向一揆をやれば長く門徒を追放するという手紙を書いております。その一つが金沢の専光寺というお寺に残っており、ます。これはちょっと余談になりますが、その時に蓮如上人の奥さんになっておられたのが蓮能尼という方です。蓮能尼と蓮如上人が結婚されたのは、恐らく文明の十七年か十八年だろうと思うのです。そして長享二年になって一向一揆が富樫政親を破るわけですが、この蓮能尼と

いうのはどういふ人であるかというのと、これは能登の守護の畠山の一族の出身なのです。いわゆる守護の出です。蓮如と蓮能尼とは齢がいくつ違うかというのと、五十歳違うのです。五十歳違うというのと、皆さんはちょっと奇妙な感じをいただくかもしれませんが、この守護の出身、お姫様である蓮能尼公が五十歳上の蓮如上人と結婚されて、素晴らしい子供たちが生まれたわけです。それはそれとして、富樫政親が加賀の一向一揆に攻められて殺されるわけなのですが、その時に蓮能尼公の里方は富樫政親を同じ守護として応援したわけです。ここで若い蓮能尼は大変なジレンマを持っただろうと思うのです。つまり富樫政親を攻める門徒たちは、自分の夫、蓮如上人の信者たちです。攻められる富樫政親は、自分の里方の畠山とは仲のいい守護同士なのです。非常なジレンマに陥っただろうと思うのですが、そのジレンマを見て、蓮如上人がこの「成敗の御書」というものをお書きになったのだらうと私は思います。だからこの「成敗の御書」を見ていますと、その行間に語りかけてくるものがあるのです。

皆さんの中に資料の研究をなさっている方がおられると思いますが、資料というのは行間を読むことでして、行間を読まないで文字づらだけでは歴史にならないわけがあります。そういう点で私、皆さんに一つ申し上げたいのは、この官僚型集団の中における人々の信心というも

## 心の関法

のは、どういふものであったかと考える場合に必要な概念として、これは皆さんに自分のものにして帰っていただきたいと思うのですが、反動形成という言葉を申し上げたいと思うのです。反動形成というのは心理学の用語でございますから、心理学を勉強している方はおわかりかと思いますが、あることに非常に関心を持つ、ところがその関心をそのまま表現したり、人に言ったりしないで、その関心と全く逆な表現をしたり、行動をすること、これを反動形成というのです。心理学では主として劣等感を説明する場合に反動形成という言葉を使うのです。劣等感というのは人間の心の弱みでございますので、その弱みを友だちにちょっと指摘されたりすると腹が立ってくるわけです。そこで逆に優越感を振り回したり、虚勢を張ったりするので、そういう劣等感と虚勢の関係ですね。それを説明する場合に、劣等感の反動形成としての虚勢、あるいは劣等感の反動形成としての優越感と、こういうふうに考えたらよろしい。人間は誰でもこういった反動形成としての心理というものを持つものであります。そういうことを申し上げるのは、この中世において見事な官僚型集団を築いた門徒たちの心根の中をたたいていきますと、反動形成としての心理が、いわゆる信心とか信仰という言葉で語られている面があったということでありませう。眞実の信ではなくて、反動形成としての心理が、信仰だとか信

心というように誤解された面があったと思うのです。そこを見極めないと歴史がわからない、ということ強調したいわけでございます。

例えば、蓮如上人の『御文』というのがございますが、この『御文』の中に「掟書」という簡条があります。この「掟書」は当時の真宗の門徒の心ばえというものを非常によく示す資料だと思のですが、この「掟書」の中に、蓮如上人が特に強く注意しておられることが一つあります。それは「我は信心を得たり」といって露地大道を声高に叫んだり、歩いたりしてはいけませんということに注意しているのです。「我は信心を得たと言って露地大道を自慢して歩いてはいけません」と、こういうようにしておられる。「掟書」にあるのですね。これはその当時の門徒たちが「我は信心を得た」といって露地大道を勇ましく触れ歩いていたということを示すものです。それからもう一つは、「諸々の神、諸々の仏を軽んじてはいけません」と、こういうように注意しておられます。これは当時の門徒農民が、諸々の神、諸々の菩薩というものを経んずる風潮があったということでもあります。そこで「諸神を軽しめ、我は信心を得たり」といって露地大道を声高に叫んでいる」、ということとで私が言いたいのは、反動形成としての心理である。そういう反動形成としての心理を、信心とか安心とかいいうように考えがちがいし

てはならないのです。

蓮如上人はまた別にこういふこともいっております。これはある信者が言ったのでしよう、「どうもお話を承ってその当座はうれいような気もしますけれど、すぐまたうれいさを忘れてしまつて信心に疑問を感じるんだ」と。こういうようなことを言ったのでしよう。蓮如上人は、その原因は「得手に法を聞くからだ」と、こういうふうに言っております。「得手に法を聞く」ということは何かと申しますと、自分流に解釈し、自分の都合のいいように受け止めていくということなのです。こうなつてくるとどういふことになるか。アメリカの心理学者にゴードン・オルポートという学者がおりますが、彼が『個人と宗教』という本を書いております。これは日本語訳にもなつていて、今は大分少なくなつて手に入らないかもしれませんが、図書館に行けば恐らくあるだろうと思ひます。この『個人と宗教』の中で、「信仰、信仰というが、信仰というものは心理学の対象になる」といふ言葉を書いております。つまり「信心とか信仰というものは、特別にあるのではなくて、心理学の分析によつて解明されるものだ。心理学の対象なんだ。」と、こういう非常に横柄な言葉が出ております。これは信心を穿つた言葉ではないのですが、逆にいうと心理学の対象になるような信心しか持つていない場合もある

## 心の法

ということですが。「得手に法を聞く」ということは、そういう信心は、これは心理学の対象になるのではないでしょうか。ずいぶん前に、ある所でそういう話をして「ばかな」と言われたのですが、そういうことになってまいりますと、宗教なんて別に必要がないので、世界の心理学者が集まって人間心理を楽しますような辞書を作っていただければ一番いいわけです。例えば自分の親が死んで非常に悲しい、そういう時にはその親が死んだ時の悲しいページを繰れば、こういうように心を持ちなさいとか、こういう音楽を聞きなさいとかいうように心理的に分析し、また友だちに裏切られて腹が立つような時には、そのページを繰れば、心理学的に何か非常にいい回答を与えてくれるような、そういうものになってしまふのです。しかし信仰とはそういうものではないのです。そういうものではないのですが、得手勝手に聞くから、心理学の対象になってしまうような質の信心になってしまふわけです。

つまり、蓮如上人が「得手に法を聞くな」とおっしゃるのは、「もっと耳をすませて聞きなさい」、言葉を換えていうならば「己を空しくして聞かなければわからないのだ」と、こういうことを言っておられるのでしよう。ところが我々は煩惱の持ち主でございますので、「己を空しくする」といっても、己を空しくするような己にまた突き当たってしまうわけです。これが



## 心の法聞

煩惱でしょう。そういう点をいろいろ分析してゆきますと、どうも長い歴史を持ちながら、そして恐らく世界でこれ以上の信仰思想がないという親鸞聖人のみ教えを受けながら、そのみ教えが現実にどう生きているかということになると、いろいろ問題があると思うのです。そこで蓮如上人の偉大さというものがどこにあるのかと考えるわけです。非常に寂々としていた本願寺へ沢山の信者を集めたところに、蓮如上人の魅力と中興のいわれがあるのだと考えたら間違いであって、放っておいても集まってくるその当時の民衆の、得手に法を聞き反動形成としての信仰しか持っていないものに、どうして真実の信を教えるかというのが蓮如上人の課題だったのです。だから蓮如上人という方は、これは昔の人ではないのです。この集団とか大衆とか國家というものが正義から外れ、教義から外れていく、真実の宗教から外れていくものに対してどう対応するかという、大変な問題を持ち、そのために生涯を捧げられた人なのであります。その面で蓮如上人の中興のいわれというものを聞かなければならないと思うのです。だから蓮如上人は今申し上げましたように、何を一番心配され、みつめられたかというのと、当時の人々のこの反動形成としての心理であったと思うのです。こういう反動形成としての心理は、これは賢明な皆さんはわかるだろうと思えますが、現代も脈々として我々に続いているわけで

す。優越感を持つ人を見て「あの人はすばらしい人だ」とし、その根底にある劣等感に目をふさいでは、もうその人も見えなければ歴史も見えないということになるわけなのです。この辺の微細な人間心情のアヤと申しますか、人間の心の奥底を叩いていってみない限りは歴史はできないのだというように思います。

この反動形成としての心理ともう一つやっかいな心理が、同じような形であるのです。それが、物象化された意識というものですね。皆さんも聞いておられるように、真宗の教えは本願他力というものを示された教えであるというでしょう。この物象化された意識はどういう意識かといいますと、これは元来は唯物論者の言葉なのでして、もっと拡大して利用すればいいと私は思うのですが、物象化された意識というものは、こういうように理解していいと思ふのです。これは私が作った言葉ではなく、アメリカのピーター・バーカーという社会学者の言葉を引用させていただくのです。創造主は創造物を創るわけです。物を創造するわけですね。ところがその創造主が自分が創ったということを忘れて、「創ったものによって自分が創られると逆に考える意識」、とこういうようにいっているのです。これを「物象化された意識」と言っています。これは青春の真っ只中におられる皆さんは、時たまこういう物象化された意識

## 心の法

で自らを慰めておられるだろうと思うのですけれども、「自分が創っておきながら、創った自分を忘れて創られたものによって自分が創られている」という意識です。だからもっと端的にいうと、創造主と創造物の弁証法的関係をネグレクトしてしまって、創造物によって生かされるということです。

そうすると親鸞聖人の本願他力という言葉は、これはそういうような物象化された意識でもなんでもないので。ところがその他力ということを物象化された意識に置き換えて考える、こういう信者が非常に多いわけです。これも「得手に法を聞く」わけです。自分の都合のいいように法を解釈して、その法によって自分が救われるのだ、と自分に言いきかせているのですが、自分が作ったものにすぎないのです。阿弥陀仏とか神とかいいながら、そういうものが別に私を創ってくださると思いつながら、実はその神を創り、阿弥陀仏を自分が創っているのです。だからいざという最後の時になりますと、当てにならないわけです、自分が創ったものすから。本当に人間が困難にぶつかった時に救いにならないわけです、自分の心理的作用なのですから。そういうものを宗教と考えて、都合のいい時は「私、信心を持っています」とか、「私は真宗の教えを喜んでいます」といいながら、物象化された意識、つまり創造物によって

自分が生かされているというように、逆に考えることにおいて他力を意識する。これは他力ではなくて自力なのです。自分の理解で仏様を創り上げて、創り上げた仏によって自分が救われると理解していくことなのです。だからそれは所詮自力なのです。他力ではないわけです。そういうのを言葉を換えていうならば、自己疎外ともいえます。自分で創ったものを自分で創ったと思わないようになってくるわけです。自己疎外です。それからまたイクスターナリゼーションとすることが昂じていきますと、精神異常になるのです。つまり本当は今日、私一人になって自分を考えたいのだなあという、こういう気持ちを持っているのです。それが本音なのです。ところが、その本音が本音として意識できないようになってしまつて、「あの友だちは私を非常に白眼視する。あの人は私をどうも嫌っている。」というような格好でしか表現できない。こういうのをイクスターナリゼーションといいます。まあ、ポストの赤いのも、電柱の高いのも私のせいであるという言葉は、かつての乙女たちに非常に流行った言葉でございませうが、とにかく本当の原因が自分でありながら、それがもはや意識できなくなつて、他から強迫されたり圧迫されたりしているとしか考えられないような状況、これはイクスターナリゼーションということです。このイクスターナリゼーションというのが昂じますと、異常をきたし

## 心法の聞

ます。ところがそのぎりぎりの線で考えている人が非常に多いのです。

ハーバード大学にクレガ・アルバートという教授がおります。このアルバートさんは一向一揆の研究が主眼なのです。十五年ほど前になりますが、京都大学の亡くなりました赤松俊秀先生からお前が指導せよということで、毎週このアルバートさんと一向一揆の話をしたのです。二回目ぐらいの時にアルバートさんから「あなたは、門徒たちは他力を信じてというが、他力とイクスターナリゼーションはどう違うんだ」という質問を受けまして、ギャフンといったことがあるのですが、イクスターナリゼーションとそれから他力ということですね。このイクスターナリゼーションの、いわゆる「させられている」という意識と「私は仏様によって生かされて生きている」という宗教的信念はまったくどう違うのかということについて、我々はしっかり見定めていかなければならないのです。単なるイクスターナリゼーションや物象化された意識を持って「宗教の救いだ」と錯覚してはならないわけです。その辺を見定めることが、非常に重要になるわけです。やっかいな話をこれ以上いたしません、とにかく我々は歴史を学ぶ場合には、「こういう資料によって、こうやります」というように言うのです。だけれども、資料というものはある面において非常に不確かである。資料が確かではないと同時に

に、その資料を見る私も不確かである。そういう中であって、確かな歴史をみつめるにはどうしたらよいのか。歴史研究は、これから新しく出発しないとだめだと思います。歴史研究はその方法を除外しては未来はないのだというのが私の考えであります。とにかくそういうとてつもない一つの壁にぶつかっておりながら、なおかつエリヤスカネティーのような仕事をしたいなあと考えておるのが私なのです。わかりにくい話でございましたが、よく静聴していただきまして有難うございました。

——一九八一・一〇・二八——